

光と緑の風通信

発行/2012年2月24日 編集/福島県立医科大学看護学部 〒960-1295 福島市光が丘1番地 TEL024-547-1111 (代)

卒業生へ贈る言葉



大いなる希望を持つて

看護学部長 鈴木 順造

ご卒業おめでとうございます。皆さんの輝かしい前途を祝し、心からお祝いを申し上げます。

を維持する、といった心構えを持ち続けることが大切です。

近い将来、大きく成長した皆さんの在り様を楽しみにしております。

皆さんが、自信を持って、さらに将来に希望をい দিয়ে、自分が選んだ道を進んでいくということは大変素晴らしいことです。しかし、人生は長いものです。これから半世紀以上も皆さんは、社会人として、医療現場をはじめとしていろいろなところで活躍していかねばなりません。そのた

今、我が国には昨年生じた東日本大地震・大津波による被災、さらに原発事故による深刻な事態を迎えて、非常に厳しい試練が課せられています。しかし、皆さんは、本学で学んだ知識・技術を使いこなし、どのような困難に遭遇しても安易に逃げ道を探すのではなく、自分の英知を働かせて切り抜けられるものと思います。ナイ

健康に留意されて、今まで支えてくれた方々や本学でお世話になった先生方に感謝し、本学や友人との交流をこれからも大切にされることを望みます。

(すずき じゅんぞう)



「真実」を見つめて

看護学研究科長 横田 素美

ご卒業ならびに大学院修了おめでとうございます。

力が問われてきます。周囲が混乱し、憶測などが飛び交う中で、「真実」を見極める力が重要になってきます。

も同じことが言え、対象が表現していることが、その方の本当の「真実(真意)」とは限らないことがあります。多角的な視点で物事を見て、事実を組み合わせてながら「真実」を追求することで、見えてくるものがあると思えます。それらが、きつと大切にならなければならないことや守らなくてはならないことだと思います。しっかりと「真実」を見つめ、一歩一歩、地に足を着けて、歩んでいけることを心より願っています。幸多かれ!!

学生生活から社会に向けて一歩を踏み出すこの時期、それぞれの胸の奥には、どのような決意や夢があるのでしようか? 昨年の3月に遭遇した東日本大震災の経験から学んだように、人生においては思わぬ出来事が

ただ、一言で「真実」と言っても、真実ほど難しいものはないかも知れません。必ずしも表に現われていることが「真実」とは限らないからです。これは看護の対象を理解するプロセスで

(よこた もとみ)

これからのことを考える

学部1年生 渡辺 彩乃



2011年
3月11日にお
きた東日本大
震災は、今まで

経験したことのない、とても辛い体験でした。そしてあの震災から約1年が経つ今も、放射能の問題をはじめとして、復興に向けての道のりはまだまだ遠いと思います。

以前、東日本大震災への募金活動に参加したことがあり、その活動の中で、実際に被災された方に「私たちの気持ちを分かっている。上辺だけだ。」と言われたことがありました。あの震災について感じたことはそれぞれ違うと思います。そして、被災された方々の気持ちを100%理解することはできないと思います。復興に向けての活動も、理解されないかもしれません。しかし、このまま立ち止まってしまうのではないかと思います。まずは私から復興に向けて何らかの活動をして進み続けていきたいと思います。

(わたなべ あやの)

「自分にできること」で支援

学部2年生 秋山 彩子



震災から数
日間、私は自分
の子どもと弟
夫婦の子ども

たちの世話をした。弟夫婦はそれぞれ介護と医療の専門職に従事しているため、私と母に子どもたちを託し、各々の職場に通った。保育園が休園となったからである。母は祖母と母の叔母の介護をしている。二人とも別々の施設にロングステイとショートステイで滞在中であり、そのまま継続させて頂けた。震災直後は人の手が必要だ。子どもを置いてボランティアに参加するわけにもいかず、当時はもどかしい思いをした。しかし、弟たちが職責を果たすためには、誰かしらが子どもを預からなければならなかった。祖母たちの施設の職員もこのような支援を得て職務にあたっていたのだろう。今になってみれば、このような後方支援も災害時の助け合いであり、私なりにできることをやれたのではないかなと思う。

(あきやま さいこ)

子どもたちとの関わりを通していま思っていること

学部2年生 松本 里帆



私は、福島県
立医科大学に
入学してから
現在まで附属

病院の小児科に入院している子どもたちを対象にボランティア活動をしています。大震災後はこの経験を生かし、あづま総合運動公園の体育館に避難している子どもたちと工作や遊びを通じた交流や炊き出しなどの活動を行いました。避難所の子どもたちは喜怒哀楽が激しく、様々なストレスや不安から精神的に不安定でした。人々の生活や街の現状にはよく目が向けられていますが、人々の心が受けた震災による影響はないがしろにされていると痛感しました。私は看護における知識や技術はまだまだ未熟ですが、多くの人が負った心の傷に目を向けながら、一看護学生としてより一層勉学に励んでいきたいと思います。そしてこれからもボランティア活動を続けていきたいと思います。

(まつもと りほ)

これからのことを考える

学部3年生 福田 理恵子



私は、震災によ
り、当たり前の
ことが当たり
前でないこと

を痛感した。大学で勉強ができるという事がいかに有難いかという事に感じ、今までの日常に繰り返し感謝した。震災時は実家に帰省しており、震災の状況をテレビで知った。その様子を見て、部員と友人の安否が気になり、連絡を取った。震災直後は、私が連絡係となり部員や友人の代わりとなって、それぞれの家族に無事であることを電話で伝えたり、無事に家に帰れるための手段や避難所の場所を調べたり、災害掲示板への掲載などを行った。時間が経つにつれて、人々の間で震災が風化してしまうのではないかと感じる。今でも震災の影響を知ってもらうために、私は感じたこと考えたことを文章にし、新聞社に投稿している。些細な行動かもしれないが、自分の意見が紙面を通して全国の誰かの目にとまり、何かを考えてもらえたら非常に嬉しい。相手が見えな活動だが、長く続けていくことが大切だと思うので、コツコツと続けていきたい。

(ふくだ りえこ)

避難所ボランティアを通じて

学部3年生 藤原 未来



私は震災の後、医大赤字奉仕団の活動で、避難所の

子供たちと遊ぶというボランティアに参加する機会があった。はじめは、子どもたちと遊ぶことで本当に役に立つのだろうかと思うところもあった。しかし子どもたちの笑い声が響くと、避難所全体が明るくなり、周りの大人たちの表情も明るくなっていくようであった。また、ボランティアに参加することで、沈んでいた自分の気持ちもだんだんと前向きになっていくのを感じた。ボランティアの対象は子どもたちであったが、間接的に周囲の人たちへの心のケアにもなっているのを感じ、この体験から、震災のような大きな危機を乗り越えるためには心のケアが重要だということに気がついた。この気持ちを忘れずに、看護を志す一人として、疾患という大きな危機を乗り越える患者さんの心のケアを大切にできる看護師を目指していきたい。

(ふじわら みく)

特集 第2弾

「3・11あのととき私たちは」

がんばろう
くしま!

3.11東日本大震災からまもなく一年が経とうとしていきます。今回は私たち福島県立医科大学看護学部学生として震災について振り返りそして、私たちが歩む復興への道について考えていきたいと思います。

Fight!
Fukushima!



あの子どもが今までの当たり前前の生活を少しでも取り戻せるよう支援が進むことを願います。(うえの ちなみ)

光あるほうへ

学部3年生 守家 詩織



私の故郷は福島県浜通りにある豊かな緑ときれいな海

が自慢の双葉町である。震災からいままでの間、言葉にできない思いが溢れ、悔しいのか、悲しいのか、その思いをどこにぶつけていいのかわからず、苦しい時期が続いたこともあった。何よりも辛かったのは、故郷に帰れないという事実よりも、故郷の人々から笑顔が消え、どこにもぶつけることができない怒りに心が染められてしまったことである。震災当初、避難所でお年寄りに体を動かすことを勧めて回ったり、共感的な姿勢で話を聞いたり、少しでも希望を持ってもらえるように関わることが自分にできた精一杯の活動だった。震災から1年が経とうとしている今、いつまでも「被災者」は語れない。これからは未来への「前進者」であるべきだと思う。怒りや憎しみではなく、今ある想いを優しく思いやりの力に変えて生きていくことが、形だけではない本当の「復興」に繋

がると私は信じている。

(もりいえ しおり)

避難所ボランティアで感じたこと

学部3年生 上野 智奈美



震災後、私は避難所で生活する子供たちに勉強を教えるというボランティアに参加していました。初めはみんな口数が少なく戸惑ったような様子でした。しかし、避難所から学校に通うようになってから次第に、子供たち同士で笑いながら勉強していたり、学校のことを楽しそうに教えてくれたり、と、元気を取り戻していつか帰るという気持ちが通えるようになってきました。子供たちにとって、場所が違っても「学校」といういつも通りの場所に通えるということがとてもうれしかったのだと思います。かと思えます。それはよいことですが、あの子どもたちは今までの当たり前だった生活がなくなってしまうのだということを実感して、悲しくも思いました。今後あの子どもたちがどこで暮らすことになったとしても、

笑顔の力

学部3年生 阿部 仁美



私は東日本大震災が起きた後、水道局や電気会社の人

たちが一生懸命復旧のために働いているのを見て、何か自分にできることはないかと思い、福島市で一番大きな避難所である、あづま総合運動公園で服の仕分けや食事の準備、配給などのボランティアを行った。3月の寒い時期に避難者は床に毛布を敷いただけ、という環境で生活しており、表情も暗く、不安な様子が見られた。しかし、目を追うごとにたくさんの衣服や食糧の支援物資が届き、さらにさまざまな団体による炊き出しやイベントのおかげで、避難者に活気が戻っていったように思う。そして4月、ランドセルを背負って「行つてきます」と避難所から登校していく子どもたちの元気な姿と無邪気な笑顔は、避難所全体を明るくしているように感じた。「笑顔は人を元気にする。つらいことがあっても笑顔を忘れてはいけない」ということを学んだ。(あべ ひとみ)

震災を振り返って

学部4年生 鈴木 龍



私は3月11日に、地元である陸前高田市で被災しまし

た。震災後は2週間近く、電気も水もないという状況で、毎日大きな不安を持ちながら生活を送らなければなりません。そんな中、周りの方々との協力は非常に重要なものでした。私たちは、お互いに食料や水を分けあったり、励ましあったり、協力しながら毎日を送ることで、少しずつ前向きな気持ちになることができました。この協力がなければ震災後の生活を送ることはできなかったと思います。私がこの経験を通じて感じたことは、周りの方々の「支え」でした。今思い返してみると今回の震災に限らず、私は、今までも多くの人に支えられながら生きてきたのだと思います。今回の震災は、非常に衝撃的な出来事でしたが、私はその衝撃と同じくらい大きな学びを得ることができました。今後、周りの方々の「支え」のおかげで、自分は成長できているのだということに感謝の気持ちを持って生活を送っていきたいと思います。(すずき りゅう)

看護婦として母として

大学院生 渡邊 あゆみ



地震の中、必死で2歳の娘を抱きかかえていたのを覚えている。

地震後娘を見ると、娘は声を失っていた。職場では食料も水も医材料も不足していく中、皆必死で看護を行っていた。その中でも続く余震と原発事故。周囲からは娘を連れて逃げろという声が聞こえてくる。しかし私は看護婦で、目の前の患者さんを置いて逃げることはできない、そう思った。と同時に私の単なる正義感の為に、たった2年しか生きていない娘の人生を滅茶苦茶にしてしまいかもしれない、とも思った。そして悩みながら出した結論は、ここで看護婦を続けること。この決断が良かったのかは今でもわからない。未だに外遊びが禁止されている保育園で過ごす娘を不憫に思うこともある。それでもあの時、「看護婦を続ける」と決断できたから、私は「今も看護婦でいられる」と確信している。そのことが今の私にとって、かけがえのない糧となっていることも実感しているのである。(わたなべ あゆみ)

在校生のみなさんへ

学部4年生 五十嵐 文歌



今、卒業を間近に迎え大学生活を振り返ってみると、毎日が楽しく、笑顔が絶えない充実した4年間だったと感じます。たくさんのお会いと貴重な経験を積むことで人としても成長することができました。

その中で私が在校生の皆さんに伝えたいことは、一歩踏み出し新しいことに積極的に挑戦することの大切さです。人と関わる

仕事に就く私たちは、豊かな感性と温かい心をもつ必要があると思います。そのためには自分の世界を広げ、視野を広げることが大切だと思います。そういった機会を逃さずどんどんチャレンジして、充実した学生生活を送ってください。

また、昨年の東日本大震災により福島県は大きな被害を受けました。しかし近い将来、私たちは医療者として福島県を支えていくことができます。そのことを誇りに思い、皆さんがますますの活躍をしてくれることを期待しています。

(いがらし あやか)

学生生活を振り返って

編入4年生 齋藤 とも恵



社会人経験の後に編入学した2年前。学生になることに期待と不安を抱きながら通学していたことを鮮明に覚えています。

大学ではたくさんの方と出会い、学び、そして様々な経験をする事ができました。楽しいこと、つらく苦しいこと...本当に色々なことが凝縮された2年間でしたが、一つひとつの出会いや出来事には意味があり、全

てが今の自分につながっているのだと感じます。このように思えるのは、一緒に頑張ってきた編入生を初め、私を支えてくれた、たくさんの方の存在があるからです。心から感謝しています。

大学は看護学を学ぶだけではなく自分自身として他者と向き合い、感じ考え、そして人間として成長できる場だと思えます。柔軟な頭と温かい心を養い、一人の人間として、看護師者として、成長し続けて行くことが求められているのではないのでしょうか。私も日々努力して行きたいと思えます。(さいとう とも恵)

そして自分に 向き合う時間

大学院生 田村 達弥



もうすぐ大学院での学生生活が終わろうとしています。

この2年間、とにかく濃密な時間を過ごすことが出来ました。勉強嫌いの自分が「学ぶ」ということに対してこれ程までに時間を費やすことが出来たことは奇跡だと思います。これはひとえに看護の「面白さ」に気付かせてくれた先生方や先輩・在校生の皆様のおかげです。看護に向き合えば向き合うほど迷宮入りすることも多かったですが、研究課題が見つかる度に、その課題と向き合っていくことの面白さを知り、探究することに終わりが無いことを学びました。そして看護に向き合うようになると自身の持つ価値観や信念、思考パターンなどが露わになってきます。そういった偏りや癖を自覚し、自分と向き合う時間が得られたのは貴重でした。在校生の皆様も看護に、そして自分に向き合える時間を大切にし、有意義な学生生活を送ってください。

(たむら たつや)

ご卒業おめでとう

学部3年生 熊谷 ひとみ



4年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。入学当初から学生会や各種イベント等で活躍されている先輩方を見てきて、先輩のようになりたいと憧れてその背中を追いかけてきました。勉強やテスト等においても何度も相談にのっていただきました。

特に今年は東日本大震災もあり、例年にはないご苦労も多々あったかと思えます。そのような中でも折にふれ、臨床での話を聞かせてくださったり、時には課題についてのアドバイスを頂いたりしたこと、大変感謝しております。

(くまがい ひとみ)

ご卒業おめでとう

大学院生 細川 香苗



入学してから1年間、大学院で皆さんが研究に取り組む姿を間近で見えてきました。修士論文を作成するという時間も労力もかかる大仕事に、絶え間ない情熱を持って取り組まれているその姿は、学ぶことの大変さと喜びを私たち後輩に教えてく

近で見えてきました。修士論文を作成するという時間も労力もかかる大仕事に、絶え間ない情熱を持って取り組まれているその姿は、学ぶことの大変さと喜びを私たち後輩に教えてく

4月から、皆さんの姿を大学院で見られないと思うと、寂しさと心細さでいっぱいになりますが、皆さんが大学院での学びを活かし、今後益々活躍されることを、心より期待しております。ときには大学院に立ち寄り、近況等お聞かせ下さい。お待ちしております。(ほそかわ かなえ)



平成23年度公開講座

「がんサイバー
への支援—がん看護専門看護師の
研究からいえること—

療養支援看護学部 三浦 浅子

この度は、公開講座での講演の機会を頂き感謝申し上げます。自分が関わった看護研究を振り返る機会となりました。今回は、がん看護専門看護師として携わった研究から学んだことをお話させていただきました。私は、三重大学大学院の修士論文で、「①終末期のがんサイバーに関する研究」を行いました。また、福島県立医科大学附属病院

のがん医療チームで研究組織を作り、「②がん患者への病状説明（いわゆる告知）に関する研究」を行っています。さらに、日本がん看護学会では、「③がんサイバー支援に関する看護師の知識、

信条、役割に関する日米比較研究」に携わっています。

①の結果では、患者は、自分なりの症状マネジメントを行い、最後まで生き抜くという体験をしていることが分かりました。②の研究は、附属病院の医師の意識調査をもとに、当院の現状にあったがん告知のあり方を検討しています。患者が自分の病気を知り、病気とともに生きることを支えるためには、がん告知だけではなく医療チームの関わりが重要だと考えられます。③の結果では、看護師の特徴として、診断治療期の看護を重要視しています。患者の生活に即した支援については関心が低いことが分かりました。

がん対策基本推進計画では、すべてのがん患者・家族の安心を目標に掲げていますので、今後も、がん患者の生活を支えられるようながん看護のあり方を探求していきたいと思っています。

(みうら あさこ)

平成23年度公開講座より

光が丘祭を振り返って



学部2年生

佐藤 あゆみ

光が丘祭はとても熱気にあふれたものだったと思います。

学祭に向けては、実行委員や各部署が時間を見つけて準備を行い、当日を迎えました。

当日は多くの部活が模擬店を出店し、駅伝やライブなどをはじめとする様々なイベントが行われました。どの模擬店にもぎわっていて、ライブやイベントにもたくさんの人が参加していました。私も部活の模擬店で先輩や同期そして後輩とともに、協力しながら準備を行い、当日も販売などをしました。多くの人が足を運んでくださって忙しかつたですが、やりがいがあったとても楽しかったです。

私は、今回の学祭全体を通して多くの人のエネルギーを感じる事ができました。また、準備から学祭当日そして片付けまで、本当に多くの人の力があってこそ学祭を実施することができるといふことを強く実感しました。

最後に、運営してくれた実行委員のみなさんをはじめ、学祭に関わったすべての方々、本当にお疲れ様でした。

(さとう あゆみ)

闘病中の方とその家族の 第二のわが家「パンダハウス」

家族看護学部門 古溝 陽子



「パンダハウス」は、福島県立医科大学附属病院から車で5分程度の場所にあるファミリーハウスです。医大附属病院で闘病中の方の家族が休息のために利用したり、患者さんと家族が共に過ごしたりすることが出来る場所です。利用者の方々からは、束の間の日常生活をとり戻せる、ほっとできる場所であるとの声をいただいています。

パンダハウスは、平成9年から当時小児科病棟に入院していたお子さんの家族からの声をきっかけに活動がはじまりました。入院生活は非日常の連続です。だからこそ、患者さんと家族が日常を感じられる「第二のわが家」として環境を整えていくという姿勢を大切にしていま

す。また、この活動は「JH

H(Hospital Hospitality House) ネットワーク」という組織を通じて全国

の仲間とつながり、運営方法や質的向上の研修を続けながら、活動の定着と継続のための長期的取り組みを大切にしています。パンダハウスも活動を継続していくために、昨年はNPO法人を取得したり、ホームページの充実をはかりたりして成長発達を遂げています。

そして、何よりもパンダハウスの活動は、多くの方のご支援、暖かい心で支えられています。今後も皆様からのご支援により、パンダハウスを一緒に育てていくと願っています。今後ともよろしくお願致します。(ふるみぞ ようこ)



《国際シンポジウム》 「災害によって強められる 国際連携」

家族看護学部門 中山 洋子

東日本大震災から10ヶ月になろうとする2012年1月8日(日)、8号館(看護学部)のN301教室をメイン会場におき、4つのサテライト会場(福島県立矢吹病院、会津西病院、舞子浜病院、相馬広域こころのケアセンター南相馬事務所)をつないで「災害によって強められる国際連携」をテーマにしたシンポジウムが開催されました。このシンポジウムの参加者には3月11日の災害によって崩壊してしまつた相双地域の精神科医療を立て直すために組織されたNPO法人「相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会」の発足を記念して集ま



つた国内外の医療職やボランティア団体の方々が含まれていました。とくに米国日本人医師会は、義捐金の寄附だけではなく学術的な交流も含めた継続的な支援を考えており、今回のシンポジウムに災害精神医学

の専門家であるマウントサイナイ大学(米国ニューヨーク州)のCraig Katz先生を招聘し「災害とメンタルヘルス：米国の経験」の講演を行いました。

また、シンポジウムでは、Kan先生の他、兵庫県こころのケアセンターの加藤寛先生が阪神・淡路大震災の経験について、JICA短期派遣専門家である田中栄三郎先生が四国大地震復興支援の活動について、コロンビア大学の木間俊一先生とマウントサイナイ大学の柳澤貴裕先生が米国日本人医師会の東日本大震災後の支援活動について、マウントサイナイ大学のTony Hoopes先生が国際危機に対応する医療情報の提供について、本大学からは心のケアチームの矢部博興先生が震災後の福島県沿岸部の精神科医療の現状について報告しました。

看護学部精神看護学担当教員は、医学部神経精神医学講座の丹羽真二教授を中心に医科大学心のケアチームとして活動を共にしてきましたが、シンポジウムを通して、東日本大震災が国内外の多くの方々から支えられており、今後はこの経験を国際的な広い視野の中で捉えて支援体制を考えていく必要があることを強く感じました。(なかやま ようこ)



看護学部カレンダー

3月12日(月)～

● 春季休業

3月22日(木)

● 学位記授与式

4月3日(火)AM

● 在学生オリエンテーション
(新4年次生)

4月3日(火)PM

● 在学生オリエンテーション
(新2・3年次生)

4月4日(水)

● 入学式

4月4日(水)～5日(木)

● 新入生オリエンテーション

6月18日(月)

● 開学記念日

編集後記

少し暖かくなつたかと思つとまた厳しい寒さが戻り、暖房がいらさない暖かい春の陽気が待ち遠しい毎日です。卒業を迎える皆さんは、春の訪れと共に始まる新しい生活に向けて様々な思いを巡らせていることでしょう。今回は学生の皆さんが経験した震災についての特集でした。投稿して頂いた文章一つ一つが私の心に留

まり、皆さんの経験や思いから、私も様々なことを感じさせて頂きました。間もなく、東日本大震災から一年が経とうとしています。『ふくしまは負けない明日へ』というスローガンのように卒業される皆さんには遅く強い気持ちを持ち続けてもらいたいと思つています。最後に、お忙しい中、投稿して頂きました方々に深く感謝申し上げます。(はやし あやみ)

【編集委員】

林	正幸、本多たかし
中山	仁、横田 素美
大川	貴子、馬場 香織
福島	直美、星野 聡子
林	紋美、渡邊かおり